

飛翔拳の李通

〜李通と玉翠

老師の身体が左足を軸にして、くるりと回った。

と同時にまっすぐに伸びた右足が、李通の顔面めがけて飛んでくる。

慌てて李通は右肘で顔を覆った。 衝撃がきて、そのまま横に吹っ飛ばされた。

「痛いなあ。 老師、もう少し手加減してくださいよ」

手についた土を払いながら、李通が立ち上がる。

「ばかもの。 手加減したら修行にならないか」

「そんなことを言われても、ようやく基本套路（型）を卒業したばかりの私に対して、少し厳しすぎると

思うのですが」

老師は黙って李通に近づき、また身体を回転させた。 今度は平手の柳葉手（手刀）で、李通の頬を

はたく。

景気のいい音がして、李通はまた地面に転がる。

「何をなさるのですか。 体罰では人を育てることはできませんよ」

老師はため息をついた。

「口だけは達者なやつだな。 体罰ではないわ。 修行の続きだ。 この程度の柳葉手がかわせんで

どうする。 ほら立て。 対打を続けるぞ」

この老師のもとで、李通は五年以上飛翔拳の修行を続けている。

つい先日、ようやく基本の套路の修行を終え、対打（組手）の修行に入ったばかりだった。

各段階の習得に、他の弟子の倍以上時間がかかっているこの出来の悪い弟子を、

老師は何とかしたいと思っていた。

それゆえ、つつい厳しく当たってしまうのだが、李通にはどうやら効果が薄いらしい。

「よし。 今日はこちらまで」

老師が力なく言う。

「ありがとうございました。 老師もお疲れのようですね。 声がでないではありませんか。

もうお年なのですから、無理をしてはいけませんよ」

李通が、さらっと言っただけ。

「たわけ！ 誰のせいで疲れていると思っておる。 声がでないのではないわ。 貴様の習得の悪さに

呆れておるのだ」

「しかし、それは教え方に問題があるのではないのでしょうか」

「帰れ、貴様！」

ついに老師は怒鳴り声をあげた。

☆☆☆

道場からの帰り道。

李通は腕や足をさすりながら歩いていた。 老師との対打で、身体中があざだらけなのである。

「ほんとに年寄りのくせに、すぐに本気をだすんだからなあ」

などとぶつぶつ言いながら、ゆっくりと歩みをすすめる。

下段攻撃の対打で、膝を何度も蹴られていた。 それゆえ普通の速さで歩くことができない。

「こんな調子では、いつになったら家につくことやら」

さらにぶつぶつ言いながら歩いていくと、前方の分かれ道のところに人影があった。

男女が言い争っているように見える。 というより、男が一方的に大声を出しているらしい。

二人も李通の姿に気づいた。 男の方が歩み寄ってくる。

「よう。 李通じゃないか」

「そう言うお前は、黄心じゃないか。 何を騒いでいるのだ」

「騒いでいるわけじゃない。 こいつを口説いていたんだ」

黄心は女を指差す。

顔を袖で覆っているのでよく見えないが、高価な衣服を着ている。 このあたりの農家の娘ではなさそうだ。

「口説いているようには見えなかったぞ。 てっきり喧嘩を売っているのかと思った」

「なんで女なんぞに、この俺が喧嘩を売らねばならんのだ」

「お前なら女でも子供でも喧嘩を売りそうだ」

「なんだと？」

黄心がぐっと顔を寄せる。 酒の臭いがした。

「そういえばお前、長いこと拳法を習ってるよな。 それで、この俺に喧嘩を売るつもりってことか？」

「長く習っているが、上達はしてないぞ」

「自慢することか？」

「いや一応、物事は正確に伝えないとな」

黄心とのやりとりの間に、李通は手を振って女に『行け』と合図を送っていた。

女はうなずいて走っていった。

黄心がそれに気づいて追いかけてやろうとするのを、李通は制した。

「こらこら、どこへ行く。 逃げるのか？」

「何をわけのわからんことを。 お前、あいつを逃がしたな」

「何をわけのわからんことを。 お前がのんびり談笑しているから、お帰りになっただけだろう」

黄心の目つきが変わった。 怒気をおびている。

「貴様あ……。 俺は昔っから、お前のその人を馬鹿にしたような物言いが大嫌いだったんだ。

一度、痛い目に合わせてやるつもりだったからな。 ちょうどいい」

「馬鹿にしたようなではない。 馬鹿にしているんだ。 何しろお前は馬鹿だ」

黄心の正拳がとんできた。 頬にまともに食らい、李通はよろける。

「飛翔拳とかいうインチキ拳法を見せてみる。俺の太祖長拳で相手してやる」  
黄心が構える。

両足を前後肩幅に開き、両手を柳葉手にして顔面と股間を守る、いわゆる不丁不八の構えだった。

「黄心。お前が拳法を修行していたとは知らなかった。そういう大事なことは早く言え。  
知ってたら

お前なんぞに関わらなかったのに」

「今ごろになって、怖気づいたか。李通」

「いや、だから怖気づいたとかそういうことじゃなくて……」

李通はそれ以上話すことができなかった。

黄心の蹴りや拳が次から次へと繰り出され、それをかわすだけで精一杯だった。

そして対打を始めたばかりの李通には、かわし続けることも難しかった。

☆ ☆ ☆

「なんだ五年も修行していて、そんな程度か。 蘇仁とかいうお前の師匠も大したことはないな」

李通に吐き捨てるように言って、黄心は去っていった。 李通は地面に大の字に倒れている。その顔は目の周りが腫れあがり、鼻と口の端から出血している。 腹に食らった一発で、息も思うようにできない。

腕と足に痛みがある。

意識だけははっきりしていた。

(そういえば老師の名前は、蘇仁だった。 久々に聞いたなあ)

身体を動かすことができないので、李通は仕方なくあお向けのまま目をつむっていた。

頬のあたりに冷たい物が触れた。 李通が目を開けると、女の顔が見えた。

水で濡らした布を李通の頬にあてている。

「なんだ……。 戻ってきちゃったのか……」

李通が助けた女だった。

女は微笑んだ。

「もうあの男は行ってしまいました。 あなた様のおかげで助かりました」

そう言って、今度は李通の目を布で冷やす。

「こんなに怪我をさせてしまって……。 申し訳ありません……」

「あの黄心って奴は、昔っから暴れん坊でね。 そいつが拳法まで習ったら、反則ですよ。」

いや、私も

修行していますが……。 喧嘩に使ってはいけないと老師から厳しく言われてますんで、今日はこのくらいで

勘弁してやろうかと……」

くすくすっと女が笑う。

「お名前を教えてくださいませんか？ 私は玉翠と申します」

「李通です。 玉翠さんかあ、いい名前だ。 その綺麗な顔にぴったりです。 ちなみにどこの家の方

ですか？」

「程家の長女です」

「程玉翠さん……。 どこかで聞いたような名だな……。 まあいいや。 あの、あまりお気遣いされなくて

結構ですよ。 その高そうな着物が、血や泥で汚れてしまいます」

「汚れは洗えば落ちます。 李通様のお身体の方が大切です」

真面目な顔で李通をまっすぐ見つめる。 視線がまぶしくて李通は目をそらしてしまう。

玉翠は何度も近くの川へ、布をひたしに行った。

ようやく腫れが少しひいてきた。 身体も動くようだった。

「もう大丈夫です。 私はこれで帰ります」

よろよろと立ち上がって、李通は言った。

「では私が家までお送りいたします」

玉翠が言う。

「いやいや、そんな必要はない。あなたも暗くならないうちにお帰りください。黄心はもう来ないでしょうが、

他にどんな困った奴らが出てくるかわかりませんよ。そうなったら、私が助けた意味がなくなるでは

ありませんか。骨折り損ですよ。まあ骨は折ってませんが」

玉翠の顔がほころんだ。

「わかりました。それでは李通様。お気をつけて」

翌日から李通は飛翔拳の修行を真面目に受け始めた。人ひとり守れないようでは、拳法修行をしている意味がないと悟ったのである。

道場での稽古に加えて、家にいるときも型の練習をし始めた。そして道場からの帰り、例の二又道のところでは、ときおり玉翠の姿を見かけるようになった。最初は怪我の具合の話をしただけで別れた。次に天気の話、作物の出来具合の話と、少しずつ会話する時間が増えていった。

「李通様はお一人で暮らしているのですか？」

玉翠が聞く。二人は二又道のそばにある川の土手に腰を下ろしていた。

「いえいえ。年寄りの母親と一緒にです。自分ができないくせに、農作業についてあーしろこーしろと、

口うるさくてしょうがない。困りますよね。誰に似たんでしょうかね。口ばかり達者っていうのは」

「口が達者なのは、李通様も同じでしょう」

「いやあ、私は達者じゃないですよ。むしろ無口なくらいです。緊張するとしゃべれなくなりますしね」

「では、今は緊張してないのですね」

「何をおっしゃいます。こんな美人を目の前にして緊張しないわけがない。ですから、ろくにしゃべれない

のではありませんか」

「しゃべってらっしゃいますが」

玉翠は笑った。身体を震わせている。

「李通様は他の男の方とは違いますね」

「違いますか？」

「違います」

「どのように？」

「一緒にいて気が休まります。良い気を運んでくれる風のような」

「なんとなくわかるような。まあ確かに黄心とは違いますな。奴はろくでもない気を運んでくるカラス

のようだ」

その時、二人の後から声がした。

「カラスで悪かったな」

二人が振り向く。黄心と男がもう一人立っていた。

「何か用かな？」

李通が言いながら立ち上がる。

「お前もなかなかやるじゃないか。 この俺が目をつけた女とちゃっかりつきあってるとはな。

女に縁のない

お前が、どうやって口説いた？」

「黄心君みたいに酔っ払った勢いで口説いたりしてはいないぞ。 口説くというよりあれは絡んで

だったけどね」

黄心のこめかみに少し血管が浮き出た。

「また得意の口先拳法か。 まあいい。 その女をこちらへ渡せ」

「はあ？ またわけのわからんことを。 なんで渡さなきゃいけないんだ。 お前、頭大丈夫か？ どっかで

ぶつけてきたんじゃないのか？」

こめかみの血管は少し太くなった。

「こいつが例の？」

黄心の隣にいる男が、黄心に耳打ちする。

「そうだ。 蘇仁老師のところの李通だ」

黄心が答える。

「よう李通。 この男はな、舜布といって、うちの楊江老師の弟子の中で、一番腕の立つ奴なんだ。 こいつと

手合わせをしてみろ。 お前が勝ったら、その女はお前にくれてやる」

「私は物ではありません」

そう言って、玉翠がゆっくりと立ち上がった。 李通の前に進み、黄心をにらみつける。

「先ほどから、まるで私を物であるかのような言いよう。 失礼ではありませんか」

「玉翠さん。 ここは私が丸く収めますから、下がっていて」

李通が玉翠の腕を引く。 その手を玉翠は振り払った。

「舜布様とおっしゃられましたね。 李通様の代わりに、私が相手になりましょう」

黄心と舜布は一瞬、驚いて目を丸くした。

次に二人は笑いだした。

「いやあ気の強い娘だ。 俺は気の強い女は、嫌いではないぞ」

黄心が言う。

「俺もだ、黄心。 いいだろう。 相手はお前でも、その李通とやらでもどちらでもいいぞ。

ここではなんだ

から、場所を移そう」

四人は土手から河原へと下りた。



「玉翠さん。 こうなってしまうたら仕方がない。 私が相手しますから、逃げてくださいよ」  
李通が懇願するが、玉翠は笑顔で首を横に振る。

「いいえ。 私がやります。 李通様は後に下がって、私の動きをよく御覧になってください」

「え？ どういうことですか」

「すぐにお分かりになります。 さあ、下がって」

玉翠の勢いに押されて、李通は後に下がる。

舜布が玉翠と一間ほどの距離をとって構える。

「女。 どこからでも打ってこい」

「おい舜布。 ちゃんと手加減してやれよ。 アザだらけの女を相手にしたくないからな」

舜布の背後から、黄心が声をかける。

その瞬間、玉翠は跳躍した。 空中で両腕が弧を描き、身体を一回転させる。

真っ直ぐに伸びた足が、舜布の顔面をとらえる。 猛烈な蹴りを食らい、舜布は横方向に転がった。

（これは……）

李通は息を飲んだ。

玉翠の見せた技は、飛翔拳のものであった。

舜布が立ち上がろうとする。 玉翠は左回りに身体を回転させながら、間合いを一気につめる

。

その姿は水鳥が羽根を広げて舞っているように、李通には見えた。

十分な回転力を蓄えた玉翠の左足が、よろよろと立ち上がった舜布の顔面を再び強打する。  
舜布は白目を向いて倒れ、動かなくなった。

黄心が駆け寄る。

「今は動かさず、そのままにしておきなさい。 しばらく休ませれば動かしても大丈夫です」

玉翠が言った。 黄心は振り返り、黙って頷いた。

「玉翠さん。 今のは……」

李通が玉翠に近寄る。

「もうお分かりの通り、飛翔拳です。 黙っていて申し訳ありません」

「人が悪いなあ。 それだけ強かったら、あの時も簡単に黄心なんぞ、追い払えたじゃないですか」

「本当に申し訳ありません。 そのようにするつもりでしたが、言うきっかけを逃してしまつて……」

「こっちはあっさりやられちゃうし、格好悪いったらありゃしない。 あ、もしかしてそのお詫びのつもりで、

わたしとつきあっているんですか？ だったら無理しないでいいですよ。 私は気にしてないですから」

「そんなことを、おっしゃらないでください！」

強い口調の玉翠だった。

「李通様は格好悪くなんてありません。 お身体を張って、私を助けようとしてくださいました。

お話に聞いていた通りの、義侠（正義漢）です」

「聞いていた通りと、言われましたか？ 私をご存知だったのですか？」

玉翠は笑みを浮かべながら頷いた。

「場所を移しましょう」

☆ ☆ ☆

玉翠と李通は先ほどまで談笑していた土手の上に戻り、腰を下ろした。

「李通様のことは、お話だけをうかがっていました」

「誰から？」

「蘇仁老師様です。 老師様には、私の家まで出向いていただき、飛翔拳を教えていただきました」

「それはいつごろのことですか？」

「半年前まで一年ほど、教えを受けておりました」

「あのものぐさな老師が、わざわざ出向いていったのですか。 やはり若い娘相手だからですな、きっと。

まったくいい歳をして、こまったじじいだ」

玉翠は笑いながら首を振る。

「いいえ。 そうではありません。 私の父と昔からの知り合いなのです」

「たとえ知り合いでも、むさくるしい息子だったら、あの老師は引き受けませんよ、絶対。 それで老師は、

いつ私の話をしたのですか」

「稽古の休憩をとっているときに、いつも李通様のことを話されておりました」

「ああ、どうせ何年たっても修行の進まない困った弟子がいるとか、口先だけは達者で人格を疑うとか、  
ろくでもないことでしょう」

玉翠は今度は笑いながら首を縦に振る。

「ええ、その通りのことをおっしゃられてました。他にも性格が歪んでいるとか、ひねくれているとか色々」

「人のいない所だと言いたい放題だな、あの年寄り」

李通は少しむっとした顔をする。

「その通りなのでしょう？」

李通の顔をのぞきこむように見ながら、玉翠が問う。

「え？ ええ、まあそうですが……。 普通、こういう場合はお世辞でも、『でも実際は違いますね』とか

言うのではないですか？」

「そうなのですか？」

「いや、まあ……。 玉翠さんが、そう思ったのなら……。 仕方ないですが」

「でも、老師様は悪口ばかり話されていたわけではありません」

玉翠は空を見上げた。

「お母様に楽をさせてあげたくて、飛翔拳の修行を始めたのでしょうか？」

李通の父親は、まだ李通が幼いころに死んだ。

女手一つで、母親は農作業に精を出し李通を育てあげた。 老いた母親に李通は楽をさせたかった。

しかし李通には商才も文才もない。

商売で身をたてることや、科挙（官吏登用試験）に合格することは不可能と言っても過言ではなかった。

あるのは農作業で鍛えた身体だけである。

そこで、都に出て禁軍（皇帝直轄軍）の衛兵に応募することにした。 衛兵として雇われるには、拳法や棍法を身につけておく必要がある。

そう思った李通は、近所に住む蘇仁老師の門を叩いたのである。

「人の家の事情まで、よく知ってるなあ、あの老師は。 しかも他人に話しちゃうし。 人権侵害ですね。

訴えられても文句言えませんね」

「ある時から李通様が急に、修行への意欲をなくされたので、老師は心配して李通様のご自宅を訪ねられたのです」

「え……。 いつの間に……。 全然知らなかった……」

「お母様は体調を崩されて、歩くことも容易ではないとか。 そのようなお母様を置いて都へ行くことは

できない、そう思われたのではないかと老師は申されました」

「……」

玉翠はまた李通をじっと見つめる。 暖かいが鋭い視線に、李通は目をそらす。

蘇仁老師のもとで修行を始めて一年ほどしたころ、母親が畑仕事の最中に腰を痛めた。

しばらくの間、寝たきりの状態で安静にしたおかげで、腰は治った。 しかし足が弱ってしまった。

家の中を歩くのがやっと、という母親の姿を見て、李通は都行きを断念した。

「本当にお優しいのですね、李通様は」

「いやあ、そんな……。 老師は話をおもしろくしようとして百倍くらい、大げさに言ってま

すよ。　ホラも

そこまで行くと芸術というか……」

さらに話そうとする李通の口に、玉翠はそっと手を当てた。

「どんな方なのだろうと、ずっと頭の中で思い描いておりました。　お会いしてみて、思っていた通りの方だと

ということがわかりました」

玉翠は李通の両手を握る。　李通の視線は両手と玉翠の顔の間を、行ったり来たりする。

「これからも、こうしてお会いすることは、できますよね」

「もももちろんですよ。　ね……願ったりかなったりというか、千客万来というか……」

李通は完全に舞い上がっていた。

「老師は玉翠さんのことを御存知だったのですね」

蘇仁老師と対打の稽古をしながら、李通が言った。

「なんだと？」

老師が動きを止める。

「なぜ私に黙っていたのですか」

「玉翠というと、程元のところのはねっかえりか？」

「はねっかえりかどうかは知りませんが……。飛翔拳を教えたそうではないですか」

「お前、玉翠と知り合いなのか？」

「何を今更、しらじらしい。以前、お話したではありませんか。黄心に絡まれていた玉翠さんのことを」

「ああ、お前が助けそこなった娘の話か。ばかもの。あの時、娘の名前をわしに伝えておらんぞ」

「伝えたはずですよ。さすが年寄りですね。記憶をなくす速度は、ご自分の蹴りより速い」

「口の減らんやつだ。まったく……。よし……。休憩にしよう」

この道場は、老師の自宅の庭を整地して作られたものである。隅の方に、休憩をとるための台が

設けられている。李通はそこに腰掛けた。

老師は自宅に入り、お茶の用意をして戻ってきた。そして李通の横に座り、茶をすする。

「玉翠と、つきあっておるのか？」

李通も茶をすすりながらうなずく。

「やはり変わっておるなあ、あのじゃじゃ馬。男の趣味も変わっている」

「何をおっしゃられます。とてもよい趣味だと思いますが」

老師は、ふっと笑った。

「程元に頼まれて教えたのだが、あれは持って生まれた才能だな。わずか一年で飛翔拳の全てを

会得してしまった」

「彼女の飛翔拳を見ました。確か、飛翔鶴舞という技でした」

「美しかったであろう」

「はい。水鳥が舞いながら飛び立っていくような……。老師の演武だと、アヒルがもがいているように

しか見えませんでした」

「失礼なやつだな」

「私は嘘をつけませんので」

「……。まあよい。ともかくだ。初めて拳術を習ったとは思えんくらいの、上達ぶりだった。お前とは

大違いだな」

「前から申しておりますように、それは老師の教え方に問題があると思われれます。まあ、私にもちょっと

やる気をなくしていた時期もありましたが……。　　そういえば、そのころ私の家へ様子を見にきてくださった

とか」

「なんだ、あの娘はそんなことまでしゃべってしまったか。　　いらんことを」

老師が茶器を台に置く。　　李通も飲み干した茶器を置いた。

「ところで老師」

「なんだ」

「程元という方は、どういう方なのですか」

「世間のことに疎いとは思っていたが、そんなことも知らなかったのか。よくこれまで生きてこれたな」

「無駄な前置きは結構です。説教くさいのも年寄りの特徴ですな」

「……。この県の書記官だ」

「ええっ？ 書記官と言ったら高級官吏ではありませんか」

「高級かどうかは知らんがな。大きな屋敷に住んでおるぞ。玉翠はその長女だ」

この県では、長官である県令の下に、部尉と書記官の2つの役職がある。

部尉は武官であり、配下に軍隊を持ち、県の防衛と治安維持を担当する。

書記官は県の書類の作成、管理から、一切の事務処理を任されている文官である。

どちらも農民の李通からしてみれば、雲の上の存在にも等しい。

「でも、老師」

「なんだ」

「そんな偉い方と、なんで知り合いなのですか？」

この古ぼけた家と道場で拳法を教えている風采の上がらない老人と、高級官僚とがどこでどう繋がるのか、

李通には全くわからない。

「お前は知らんだろうが、わしは以前、都で禁軍の連中に棍法を教えていたことがある」

「はあ。都で道場を開いていたのですか？」

「ばかもの。ただの道場主が禁軍で教えられるか。正式な棍法の師範としてだ。まあ、ほんの一時期だがな」

「ええっ！ 老師は八十万禁軍の師範だったのですか？」

素直に驚く李通を見て、老師は少し得意げな顔になった。

「少しは尊敬する気になったか。程元もそのころは中央で下っ端の仕事をしていた。文官だが武術にも

興味があったものでな。たまに棍法と拳術を教えてやったのだ。わしはすぐに辞めてこの地に移ったが、

程元は順調に出世して今は書記官様だ」

「なるほど。クビになって道場主になった老師と、高級官吏になられた程元様。すさまじい落差ですな。

目まいがしそうなくらいの落差だ」

「やっぱり尊敬してないな、お前。クビではない。自ら辞したのだ」

「本当ですか？」

「当たり前だ。嘘をついてどうする。お前ごときに見栄を張ったところで、何の得にもならん。だらけきった



中央の文官どもに嫌気がさしたからだ。 わしの後に師範になった林冲という男がいたが、これも辞めたと

聞く」

そこまで話したところで、老師は立ち上がった。

「さて……と」

李通も立ち上がろうとするが、老師がそれを制す。

「ちょっとここで待っておれ」

そう言って茶器を持ち、家の中に入る。

少しして外へ出てきた老師の両手には、六尺ほどの棒が二本握られていた。 そのうちの一本を李通へ

投げてよこす。

「これは？」

棒を受け取ったものの、いきなりの事に戸惑いを隠せない李通である。

「お前の好きなように、振り回してみよ」

「振り回すといっても……。 どうすればいいのですか？」

「だから、好きなように、思うがままに振り回せと言っておる」

納得のいかない顔をしながら、李通は庭の中央に立つ。

そしてまず棒を片手に握り、くるくると回す。 段々と回す速度を高めていく。

回しながら右手から左手へと棒を渡し、左手から右手へ戻るときは背中側から移動させる。

「ほう」

李通の棒を回す様をながめていた老師が、感嘆の声をあげた。

「棒の扱いに慣れておるようだな。 どこで覚えた」

「どこでもなにも、普段の農作業の合間にですよ。 作物を運ぶのに棒を使いますからね。 暇なときは、

よく振り回しています」

李通は回していた棒を止め、肩にかついだ。

「特に棍法を教わったわけではないのだな」

「もちろんです」

「なるほど。 誰にでも一つはとりえがあるというが、お前にもあったようだな」

「どういうことでしょうか」

「今日からお前には、棍法を教える。 よいな」

「えっ……。 それでは飛翔拳は……」

「もちろん飛翔拳の修行も続ける。 ただ……」

老師はため息をひとつついた。

「はっきり言おう。 お前が飛翔拳を会得するには、あと十年はかかる」

「……」

李通はいつもの軽口を出すこともできず、呆然としていた。

「ここ最近のお前は、実によく修行に精をだしておる。 それはわしにもよくわかっている。しかし、

この拳……というより全ての拳術に当てはまるが、向き不向きというものがある」

「……私には向いていないと？」

老師は首を横に振る。

「全く向いていないというわけではない。　だが、頭が拳意を理解し、それを身体が動きとして習得する

までに、人よりもかなり時間がかかる」

「……」

「これからお前に教える『水鳥棍』は、飛翔拳の修行を終えた者が、必ず同時に学ぶ棍法だ。

要するに、

学ぶ順序が他の者と逆になるだけだ。　わかったか？」

しばらく腕組みをして、うーんとうなってから李通は口を開いた。

「……なんとなくわかったような、わからないような。　なんとなく老師の口車に乗せられたような、だまされて

いるような、馬鹿にされているような……。　でも、わかりました」

「いつもの軽口が戻ったのなら、納得したようだな。　始めるぞ」

そう言って老師は笑った。

☆ ☆ ☆

修行を終えて帰途につく。

そして道が二又に分かれるいつもの場所に、李通は玉翠の姿を見つけた。

「もうお帰りになるころだと思っておりました」

玉翠が微笑む。

「今日も老師に少々しごかれましたよ。 おや、今日は武芸用の服なのですね」

「ええ。 父に用事を頼まれ、隣の県まで行ってまいりましたので」

「隣の県って……。 四十里（約二十キロ）はあるじゃないですか。 一人ですか？」

玉翠はうなずいた。

「こんな綺麗なお嬢さんを一人で行かせるなんて……って、問題ないか。 なにしる玉翠さん強いし。」

私が守ってもらいたいくらいに、頼もしい」

「まあ、ひどい。 女性への誉め言葉ではありませんよ」

二人は笑う。

「そういえば、玉翠さんは書記官様の家の方だとか。 今日初めて老師から聞きましたよ」

李通が言うと、玉翠は驚きの表情を見せた。

「私……最初にお会いした時、程家の娘だとお話ししたと思いますが……？」

「程家というのが、書記官様のことだと知らなかったのです」

「……からかっているのですね……」

「本当に知らなかったんですって」

「うそ。 書記官の名前を知らない人なんて、いるはずがありません」

「いや、いるですよ。 不思議なことに。 私がそういう人なんです」

「そうやって、私が信用したら、何かおっしゃるつもりなんでしょう？」

「違いますって」

「やっぱり、からかってる」

玉翠は李通の目をじっと見る。 いつもの射通すような視線である。

この目で見られると、李通は落ち着きがなくなる。 顔を赤くして視線をそらす。

と、玉翠が笑いだした。

「本当にご存知なかったのですね」

笑いながら言う。

「だから何度も、そう申し上げたではないですか」

李通は少しむっとした調子である。

「ごめんなさい。 その困ったような顔が、おかしくて。 本当に世間のことに興味がないのですね」

「いや……そんなことは……ありますが。 それより、いいのですか？ 高級官吏のお嬢様が私のような農民とこうして会ったりして」

李通の言葉に、玉翠の顔が曇る。

「李通様は、高級官吏の娘はお嫌いですか？」

「え？ いや……そんなことは……。 というより、私は玉翠さん自身が好きなのであって……高級官吏のお嬢様が好きなわけじゃ……。 いや、そうすると玉翠さんが好きじゃない、ってことになるな。

この場合の高級官吏ってのは一般的な意味であって、えーと、玉翠さんを限定しているのではなくて……。

ああ、何言ってるんだらう俺」

混乱している李通の口に、玉翠はそっと手を当てる。 そして微笑んだ。

「わかりました」

「え？ な、何がですか？」

唇に触れられた李通の顔は、耳まで真っ赤になる。

「私のことを、お嫌いでないことがわかりました」

「だから、何度も言ってるじゃないですか。 って言ってないか。 いや、嫌いなんて一言も言っていないですよ」

舞い上がって、わけのわからないことを口走る李通。 その李通を、玉翠は楽しげに眺めている。

「お願いしてもいいでしょうか」

李通の言葉を玉翠が遮った。

「なんでしょう」

「これから、李通様のお宅にお伺いしたいのですが」

「え？ そ……それは……」

「私が突然行っては、ご迷惑でしょうか？」

「いや、そんなことは……、むしろ大歓迎っていうか、先客万来っていうか。 でも、なにせ汚い家で、

年寄りもいて……」

「やっぱり、ご迷惑なのですね……」

玉翠が悲しそうな顔になる。 李通はますます慌てる。

「とんでもない。 是非お越しく下さい」

「では、お邪魔いたします」

二人が李通の家に入ると、奥の部屋から李通の母親が姿を見せた。

「おかえり。 おや、そのお嬢さんは？」

李通の後に立つ玉翠の姿を見て、母親が言った。

「知り合いの玉翠さんだよ」

「初めまして。 程玉翠と申します。 李通様とは親しくさせていただいております。 今日は無理を言って、

お邪魔させていただきました」

「程……玉翠……さん？」

その名前を聞いて、母親は少し考えるような顔をした。 そしてすぐに驚きの顔に変わった。

「もしかして……、書記官の程元様の御身内の方？」

「はい。 程元は私の父です」

「ええっ？ こ……これは、失礼をいたしました」

母親は地面に平伏した。

「私どものような身分の家へ、お越しくくださるとは恐れ多いことです」

突っ伏したまま、母親は続ける。 李通は困惑した表情で、その様子を見つめる。

「お母様」

玉翠がしゃがんで、母親の肩に手を添える。

「どうかお立ちください。 そのように恐縮なさらずに」

「そうだよ母さん。 恥ずかしいじゃないか。 そんな土下座なんかしたら」

「ばかたれ！ お前は、この方がどれだけ身分違いの方なのか、わからんのか。 わしらが顔を拝見

することすら、普通はできないんじゃないぞ」

なおも李通に何か言おうとする母親を抱えるように、玉翠が立ち上がらせる。

「お母様。 私は李通様と親しくさせていただいているのです。 李通様のお母様は私にとってもお母様です。

私を程家の長女ではなく、あなたの娘だと思ってください」

母親の両手を握りながら、玉翠が優しく話す。

母親は何度もうなずいて返した。

「すぐにお茶を入れますで。 その辺で腰掛けてお待ちください」

そう言って、母親は奥へ引っ込んだ。

その日は、玉翠も李通達と夕食を共にした。

食事の間中、母親は自分の息子がいかに変人であったか、そのためにどれだけ苦労したかを話した。

傍らの李通が何度も止めに入ったが、おかまいなしにしゃべり続けた。

「ほんにこの息子は女に縁がなくてねえ。 まあ、この性格じゃあ仕方ないですが」

「だから、なんでそういう話をここでするんだよ」

「ええじゃろが。 本当のことだで」

「もう少し脚色したり、作り話をしたりしてさ、息子を良く見せようとか思わないのか」

「これでも精一杯、よく見せておるつもりじゃが。 間に合わんくらいに歪んだるでな、お前は」

「歪んだ性格は、母さんから受け継いだものだ。 俺のせいじゃないし」

こんな調子の二人のやりとりを、玉翠は楽しそうに見ていた。

食事が終り、帰ろうとする玉翠を、母親は家の外まで見送りに出てきた。 そしてその姿が道の向こうに

見えなくなるまで、手を振り続けた。

「いい娘さんじゃなあ」

隣に立つ息子に、ぽつりと言う。

「高貴なお方なのに、少しも気取ったところがない。 よくお前なんぞを相手にしてくれるもんじゃ」

「俺の気品が物を言ったんだと思うけど」

「お前の言う気品とは、ねじくれた性格のことか？」

「まあ、そうだな」

李通は笑った。 母親も笑った。

「嫌われんようにせいよ。 もう二度とあのような方が、お前を相手してくれることなんぞ、ないからな」

「わかってる」

「さて……と。 今日はちと興奮して動き過ぎてしもうた。 腰が痛うなってきたで、寝る」

と言って腰をさすりながら家の中へ入っていく。

「まったくだ。 興奮しすぎだよ」

李通も後に続いて家に入った。

李通の水鳥棍は、修行を始めて一ヶ月もすると、見る見る上達していった。

基本の型と組手はすぐに習得し、対打の稽古に移っていた。

調子のいいときは、蘇仁老師でさえ一方的に押され、あわや負けをとるかと思われることすらある。

今日も李通の操る棍は、あるときは下からすくい上がり、そのまま上へ抜けるかと思えば蛇のように

全体をくねらせ、相手の脇腹へと目標を変える。自在に軌道を変えてくる棍に、老師は苦戦していた。

一瞬の間が見えた。李通は躊躇なく、その無防備な箇所へ棍を打ち込む。

(勝った)

と思った。

しかし次の瞬間、老師の姿はそこから消えていた。

老師は、棍を棒高跳びの棒のように使って跳躍し、李通の頭を超え背後に着地。すぐさま突きを

繰り出す。

予想もしていなかった背後からの攻撃で、李通はあっさり倒された。

「いてて……」

背中をさすりながら李通が立ち上がる。

「老師。今のは何なんですか。基本の型にありませんよ」

「いや、すまんすまん。ついつい奥義を使ってしまった」

と苦笑いする老師。

「ずるいなあ。負けそうになったから奥義を使うなんて。負けず嫌いの年寄りには、これだからいやなん

だよなあ」

「まあまあ。そう怒るな。悪かった。だがな、普通なら滅多にお目にかかることのない奥義を見られた

のだから、ありがたいと思え」

「何ですか。その開き直りは。いいのですか、そんな潔さのないことで。拳法家としてどうですか？」

老師は頭を搔く。

「……それはおいておいて。お前の上達ぶりは、目を疑ってしまうな」

むっとした李通の表情が、誉められて少しほころぶ。

「こんなことなら、初めから棍法を教えておけばよかったな。無駄に何年もかけずに済んだ」

「今更、無駄と言われても困りますが」

また、むっとした顔になる。

そんなやり取りをしていると、道場の入口方面から声がした。



「ごめんください。 蘇仁老師はおられますかな？」

見ると稽古着姿の男が三人立っている。 その中には、黄心と瞬布の姿があった。

「おお、これは楊江ではないか」

黄心と舜布の前に立つ男を見て、老師は笑顔で迎えた。

「お元気そうでなによりです」

楊江が、拳にした片方の手にもう一方の平手を添える、拳法家の挨拶をする。

「楊江も元気そうだな」

老師も同じ挨拶を返す。

「後の若者二人は？」

「今日はそのことで参りました」

楊江が目配せをすると、後の二人は土下座を始めた。

「申し訳ありませんでしたあ！」

地面に顔を伏せたまま、二人が詫びの言葉を叫ぶ。 事の次第が飲み込めない老師は、きょとんとした

顔をしている。

「はて？ どういうことかな？」

「この弟子二人が、蘇仁老師に大変失礼なことをしたそうで」

「わしは何も聞いておらんが？ おい李通。 お前は知っているのか？」

李通はにやりと笑ってうなずいた。

「そいつら、以前、玉翠にやられた奴らです。 その時、老師と飛翔拳のことを、けなしまくってたんですよ」

「なんと」

老師は突っ伏している二人の方を見る。

「飛翔拳をインチキ呼ばわりしたとのこと。 なんとお詫びしてよいのやら……。 私が蘇仁老師の下で

太祖長拳とともに、飛翔拳を学んだことを知らなかったようで。 いえ、知らなかったではすまされることでは

ありません。 どうかお許してください」

そう言って、頭を深く下げる楊江の肩を、老師はぽんぽんと叩いた。

「まあまあ。 頭を上げてくれ。 そこの二人も、もういいから立ちなさい」

二人は立ち上がり、頭を下げる。 男三人が頭を下げて突っ立っている姿は、少し滑稽でもあった。

見ていた老師と李通に笑いがこみあげてくる。

「本当にもうよいから、三人ともこちらへ来なさい。 お茶でもふるまおう」

そう言って老師は、三人を休憩用の台へ案内し、座らせた。

李通を隣の台に座らせ、家の中から茶器を運んできて、自分は李通の横に腰を下ろす。

「しかしながら」

と、老師は茶をすすりながら言った。

「そこの若者二人の言ったこと、あながち間違いではないぞ」

「どういうことでしょうか？」

口に運ぼうとした湯のみを途中で止め、楊江が問う。

「飛翔拳がインチキ拳法と言ったことよ」

「いえ……ですから、それはもう……」

と、また恐縮し始める楊江を、老師はにやにやししながら制す。

「伝統ある拳術を学ぶ者からすれば、インチキ呼ばわりしたくなるのは、わしにもわかるぞ。

なにせ

この拳は、わしが体系を整えたものであるしな」

老師を除く、その場にいた全員が目を丸くする。

「形意拳の十二形拳から鳥の形の物、他に鷹拳や鷹爪拳といった鳥の動きを模した拳術の拳意を  
まとめ

あげて、飛翔拳と名づけた。要するに、わしが始祖ということだ」

老師は高らかに笑った。

十二種類の動物の動きから作られたのが、形意拳の十二形拳である。鷹拳と鷹爪拳もその名  
の通り、

鷹の攻撃する動きから編み出された拳法である。

「でも、なぜ鳥の動きなのですか？」

李通が問う。

「鳥の方が、美しい動作になるかと思うてな。玉翠の飛翔鶴舞を見たであろう？ あれほど美  
しい動きを

持つ技は、他にない……はずだ」

「その、『はず』というあたりが弱いですね。インチキくさいと言われてしまうのも、仕方が  
ないような気が

しますな」

「また貴様は、そのようなことを言うか」

「他の拳法を全部調べて、おっしゃっているわけではないでしょう」

「当たり前だ。それほど暇ではないわ」

「それでは飛翔拳の動作が一番美しいかどうか、わからないではありませんか」

「……まったく、屁理屈ばかりこねおって。だったら、お前が調べてこい」

「いやですよ。私は老師ほど暇ではありません」

二人の会話を聞いていた楊江達は、横で笑いをこらえるのに必死だった。

「しかし私も飛翔拳が、老師の編み出された拳法とは知りませんでした」

楊江が言う。

「当たり前だ。これまで教えた誰にも話しておらんからな」

老師は悪戯小僧のような顔になる。

「ところで、うちの瞬布とお手合わせされた師範代の方は、今日は？」

楊江が問う。

「師範代？ ああ玉翠のことか。 あれは師範代ではない。 本当は師範代をやってもらいたいくらい

飛翔拳の才能がある娘なのだがな」

「なにか事情でも？」

「書記官の娘に、師範代として道場に来てもらうわけには、いかんだろう」

「と、申されますと、程元殿の御息女……」

「いかにも」

これを聞いた黄心と瞬布が青ざめた。 二人の表情の変化を楊江は見逃さなかった。

「おい。 お前達、まさか程書記官の御息女に、何か無礼な真似をしたのではあるまいな」

それまでの穏やかな目が、厳しいものになった。

「いえ……、あの……」

「そいつら、玉翠を無理やり連れていこうとしたのですよ。 それも二度も」

と言ったのは李通である。

「最初の時は私が助きました。 手加減してやったので、黄心は無傷で帰れましたけどね。 二度目は、

その瞬布とか言う奴を連れてきて、玉翠に返り討ちにあったのですよ。 一番弟子のくせに、精神の修養が

一番できてないようですね」

「今の話は本当か？ 私は聞いておらんぞ」

楊江の口調には怒気がこめられていた。

「あ……あの、も……申し訳ありません」

黄心と瞬布は台から地面に飛び下り土下座した。

「し……知らなかったものですから……。 書記官様の娘さんとは」

黄心が震える声で言う。

「書記官の娘でなかったら、連れ去ってもよいのか？」

「いえ……、そんなことは……」

「そこにおられる老師の高弟の方が言われた通りだ。 お前達は精神の修養が足りない。 足りなさ過ぎる」

楊江は立ち上がり、老師と李通に向かって深く頭を下げた。

「この者達の不始末は、ひとえに私の教える力のなさによるもの」

「まあまあ。 もう済んだことだ」

老師が言う

「お願いがございました」

「なんだ」

「我々三人をしばらくこちらで修行させて下さい」

「なにもそこまでしなくとも……」

「いえ、是非とも。私自身も今一度、老師の教えを受け、師範としての修行をし直したいと思います」

楊江が言い出したら聞かない性格だったことを、老師は思い出した。

「わかった」

と、ため息をつく。

「明日より、三人とも参れ。それから、一つ訂正させてくれ」

「なんでしょう」

「この李通は、高弟ではない。できの悪い弟子の一人に過ぎん」

「老師。なんでばらしてしまうのですか。ちょっとの間、いい気分になんてさせてくれないですか」

李通が絡む。

「お前を高弟と言ってしまうのは、わしの面目に関わる。わしがいい気分にならん」

「ついさっき、そのできの悪い弟子に負けそうになったのでは？」

「うるさい！ 黙れ！」

初めて李通の家を訪れて以来、玉翠は毎日のようにここへきては、農作業の手伝いや母親の相手をしている。最近では夕食の支度も玉翠がする。

最初のうちこそ、母親は

「書記官様の娘さんに、そんなことはさせられない」

拒んでいたが、いつのまにか台所で支度をする玉翠の姿を、嬉しそうに眺めるようになった。

「いつもいつも、ほんに申し訳ないです」

寝台に横になった母親が声をかける。

「何をおっしゃいます。私の好きでやっていることですから」

玉翠はにこりと笑って、いつものように応える。

「ほんに夢のようですわ。あのひねくれ息子が、綺麗な嫁さんを迎えて、こんな暮らしが出来るように

なるとは。おっと申し訳ない。嫁にこられたわけでは、なかったですな」

「お母様」

玉翠は支度をする手を止め、母親の方を振り向く。

「へえ」

「私はもうこの家の娘のつもりですよ」

母親の顔がぱっと輝いた。

ちょうどそこへ李通が帰ってきた。

夕食の席で、李通は今日の道場での出来事を話した。

「その時の黄心と瞬布の顔を、玉翠に見せたかったよ。青ざめてぶるぶる震えてるんだ。鈴をつけたら

きっといい音をたてたと思うよ」

李通の玉翠に対する接し方は、かなりくだけたものになっていた。玉翠がそう望んだからである。

「楊江という方も、ご一緒に修行なされるのですか？」

「うん」

「では李通様は、その方達の兄弟子になるのですね」

「おお、そうだ。そういうことになるな。すばらしい」

「兄弟子でしたら、武技はもっと上になりませんか、いけませんね」

玉翠が悪戯っぽい目で李通を見る。

「なかなか痛いところをつくね。なんか最近、性格が私に似てきていないか？」

「ずっと一緒におりますから。多分うつつたのでしょう」

「うつつたって……。私の性格は風邪みたいなもんか？」

「そうかもしれません」

「ひどいなあ」

二人は笑う。傍らで話を聞いていた母親も笑う。

「そういえば玉翠は、老師が昔、禁軍の棍法師範だったことを知っていたのかな？」

「ええ。 父から聞いておりました」

「ああそうか。 お父上とは、知り合いだって言ってたものな」

「老師御自身は、そういう話をされませんでした。 自慢になるような話はお嫌いのように」

「その割には、私にはとても自慢げに話していたけどね」

「李通様に誉めてもらいたかったのでは？」

「そうかもしれないなあ。 なにせ歳は食ってるけど、中身は子供だ」

「それは李通様も同じでは？」

と、また悪戯娘の目になる。

「……うっ……、まあ……そうかもしれない。 で、楊江さんと老師が話しているのを聞いていたんだよ」

「はい」

「老師の後に、禁軍の棍法師範になった林冲という人の事なんだが」

その名前を聞いて、玉翠の表情が少し硬くなったことに、李通は気づかずに続ける。

「上官と揉め事を起こして辞めたあと、梁山泊の連中の仲間になったらしいのだ」

「……」

「元禁軍の師範が、山賊になったというのだから、驚いてしまったよ。 まったく……」

「あの方達は山賊ではありません！ 義賊です！」

玉翠が突然強い口調で、話を遮った。 李通も母親も勢いに吞まれて、ただじっと玉翠を見つめている。

「山賊とは、罪のない普通の方達を襲い、金品を奪い、時には命を奪う輩のことを言うのです。 梁山泊の方達は違います」

「……しかし、商人を襲って金品を強奪していると……」

「あの方々が襲うのは、人としての道を踏み外した商いを行っている商人だけです。 奪った金品は

貧しい家に配っているとも聞いております」

「……」

「決して、山賊や野盗などではありません」

これほどまでに激しく感情を出す玉翠を、李通も母親も見たことがなかった。 なぜここまで梁山泊を

擁護するのもわからなかった。

しばらく沈黙が続いた。

「……申し訳ありません。 今日、これでおいとまいたします……」

玉翠は椅子から立ち上がると、逃げるように帰っていった。

「どうしたんだろうねえ……」

母親がぼつりつつぶやく。

「……」

李通は呆然と玉翠を見送っていた。





翌日、いつものように玉翠は李通の家に姿を見せた。そしていつものように母親と楽しそうに会話をし、道場から帰宅した李通を笑顔で出迎えた。

李通も母親も、昨晚のことについて触れることはなかった。

こうしてまた、これまで通りの生活が始まった。

母親はことあるごとに

「夢のようだ。 夢のようだ」

と言い、玉翠は笑顔でそれに応えた。

夢のような生活は三ヶ月続いた。

ある晩、玉翠は

「明日はまた父の所用で遠方まで出かけねばなりません。 明後日、またお邪魔いたします」

と言って帰っていった。

そしてその日以来、玉翠は姿を見せなくなった。

☆ ☆ ☆

何か玉翠の身にあったのだろうか、李通は町まで行ってみた。通りがかりの者に道を聞きながら、

書記官の官邸までたどりついた。

李通は、官邸というものは、建物が一つだけあるものと思っていた。

しかし今、目の前にはいくつもの建物が、延々と続く塀に囲まれている。敷地がどれだけの大きさなのか、

李通には見当もつかない。

塀づたいに歩いてみると、大きく立派な門があった。門の前には屈強な衛士が二人、鉄矛を手にして

立っている。

衛士に守られた内側は静かである。何か異変があったようには見えない。

官邸の威容を目の当たりにしているうちに、李通は気分が落ち込んできた。

やはり玉翠は高級官吏の娘であり、自分とは身分が違う、ということを知らされた。

自分のところへ来たのも、一時的な気の迷いだったのではないか、とも思った。

「諦めるしかないか……」

李通は、ぼそりつつぶやいて帰途についた。

李通が道場に行ってみると、いつもと雰囲気は違っていた。  
老師と楊江は休憩台で難しい顔をして、手紙らしき物を読んでいる。 道場の真中で黄心と舜布の二人が  
何やら話をしている。

李通に気づき、黄心が駆け寄ってきた。

「おい李通。 お前、町の噂を聞いているか？」

「噂？ 何のことだ？」

「やはり知らないようだな。 玉翠さんの家が、まずいことになっているらしい」

「えっ」

李通の鼓動が速くなる。

「どういうことだ。 まずいことと言うのは」

「程書記官が梁山泊の連中と通じていたそうだ」

「梁山泊……」

「なんでも定期的に資金や食料の援助をしていたという話だ。 近々、部尉が動き出すと町の噂に  
なっている」

李通は、梁山泊の話で感情を露わにした玉翠を思い出していた。 また父親の用事とやらで定期的に  
遠出をしていたことも思い出していた。

あのときに、梁山泊の連中に会っていたのだろうか、と李通は考えを巡らした。

「部尉が動き出すと、どうなるのだ？」

「お前は本当に何も知らないんだな。 官位剥奪の上、家族全員捕えられ、死罪に決まっている  
だろう」

呆れ顔で黄心が答える。

「おっと忘れるところだった。 玉翠さんからの手紙を預かっている。 ほらよ」

「玉翠がここに来たのか？」

「使いの男が来たんだよ。 いいから受け取れ」

黄心から渡された手紙を、李通は開ける。

中には

『今宵、初めてお会いした場所で』

とだけ書かれていた。

手紙を握り締めて呆然とする李通のところへ、老師と楊江が近寄ってきた。

「おお、来ていたのか李通。 程元がまずいことになってな……。 と、その顔からするともう  
聞いておるな」

「ええ……まあ……」

「いつもにも増して呆けた顔だな。 その書状は？」

老師は李通の持つ手紙に気づいた。

「玉翠からです……」

「見せてみよ」

玉翠の手紙を一読して、老師はうーんとうなった。

「李通よ」

「はい」

「程元からの手紙によれば、部尉は今夜、兵を動かすらしい。その前に一族郎党を引き連れ遠くへ

逃げるとのことだ」

「今夜ですか」

「そうだ。その玉翠の手紙の意味がわかるな？ 別れの前に、お前に今一度会いたいということだ、

わかるな？」

李通は黙って頷く。

「玉翠が急にお前のところへ行かなくなったのは、部尉の手の者が周囲を嗅ぎ回りだしたからだろう。

お前を巻き込みたくなかったに違いない」

「玉翠の気遣いだったのですね……」

「うむ。あれはそういう娘だ」

「もう会えなくなるのでしょうか」

「それは、わしにもわからん。今夜、お前と玉翠でよく話をしてこい」

「……わかりました」

☆ ☆ ☆

深夜。

李通は、初めて玉翠と出会った二又の道に立っていた。

手には、普段農作業で使っている長さ五尺ほどの棒を持っている。もし部尉の兵隊が来るようならば、

これで相手をしようという覚悟を決めてきた。

町へ通ずる道から馬を走らせる音が聞こえてくる。玉翠だった。

修行用の着物に身を包み、腰には剣を、手には鉄矛を持っている。李通の姿を見ると、すぐに馬から

下り、李通に飛びついてきた。

李通はその身体をしっかりと抱きしめる。

「玉翠……」

「李通様……」

「行ってしまうのか……」

「申し訳ありません……。本当は、行きたくない……。李通様の家で一緒に暮らしたい……」

「ならば、そうすればいいじゃないか。俺の家にしばらく隠れていれば……」

玉翠は頭を横に振る。

「この県にいては、いずれは部尉の兵に見つかります。そうなったら李通様にも迷惑がかかります」

「……どこまで行くつもりなのだ？」

「とりあえず父の知り合いの家に」

「遠いところか？」

「はい……」

李通は玉翠の身体を、そっと離す。

「俺も一緒に行ければいいのだけれど……。母親を置いていくことはできない……」

「そうおっしゃられるとっておりました。私はそういう李通様が好きなのです」

玉翠は李通の目をじっと見つめる。李通もその視線をうけとめる。もう避けるようなことはしない。

「迎えに行く……」

「えっ……」

「ほとぼりが冷めた頃、必ず迎えに行く。どこへ行けばいいのか、教えてくれ」

玉翠はうなずいた。そして胸元から紙を一枚取り出し、李通に渡す。

その時、また町の方から馬車の走る音が聞こえてきた。四頭立ての馬車が二台、走り抜けていく。

「私の家の者達です」

玉翠が言う。

三台目が二人の目の前で止まる。

「玉翠様」

御者が声をかける。

「部尉が兵を出しました。 追手が迫っております。 急いで」

「わかりました。 先に行ってください。 すぐに後を追います」

馬車は走っていった。

玉翠は李通の方へ向き直る。

「もう行かねばなりません」

李通はもう一度玉翠を抱きしめた。

「待っていてくれ」

「お待ちしております」

玉翠は馬に飛び乗り走らせる。 姿が見えなくなるまでの間、玉翠は何度も振り返った。その頬に、月明かりに照らされて、涙が光っていた。

「やれやれ。 やっと出て行けるわい」

暗闇から突然声がして、李通は驚いて棒を落としそうになった。

老師が姿を現す。 続いて楊江、黄心、瞬布も現れた。

みな鉄矛を手にしている。

「老師……。 なんでここに……」

「ん？ 手助けしてやろうと思ってな」

「手助け？」

「どうせお前のことだ。 部尉の追手を邪魔して、時間稼ぎをしてやろうと考えているのであるらう。

しかしな。 お前の腕では、ほとんど時間稼ぎにならん。 わしらが来れば、相当な時間稼ぎになる」

「お前にだけ、いい格好させとけないしな」

黄心がにやにや笑いながら言う。

「ひさびさに大暴れしてやりますか。 部尉の兵は百人くらいですかな」

楊江も楽しそうに言う。

「そうだな。 わしと楊江で五十は相手できよう。 黄心と瞬布が四十。 あとの十を李通、お前がやれ」

と言ったのは老師である。

「十人ですか？ ちょっときつくないですか？ 三人くらいにしてくださいよ」

「情けないことを言うな。 玉翠のために、そのくらい頑張れ。 ほれ。 もう一本、鉄矛を持ってきてやった。

これを使え」

老師が投げた鉄矛を、李通は受け取る。

遠くから何十人もの走る音、馬の駆ける音が聞こえてきた。

「来ましたな」

楊江が言う。

「よし。 では、派手に行こうぞ！」

五人は鉄矛を振り回しながら、部尉の兵達に向かって走っていった。

おわり